
自閉スペクトラム症の私は、 いかにこの世界を生きているか

当事者批評・脳の多様性・文学と哲学

横道 誠編

石原真衣，斎藤真理子，高野秀行，
頭木弘樹，柴崎友香，松本俊彦著

金剛出版，四六判256頁，2,750円，2025年7月刊

（長崎大学生命医科学域保健学系作業療法学分野）**今村 明**

本書の著者・横道誠氏は，文学および当事者研究を専門とする研究者であり，自閉スペクトラム症（ASD），注意欠如多動症（ADHD），アルコール依存症，アダルトチャイルド，LGBTQ＋，宗教二世など多様な当事者性を併せもつ人物である。著者によれば，「当事者研究」とは，障害や疾患の当事者が自らの苦勞の仕組みを仲間と共に探究し，生きやすさを模索する精神療法的試みである。また本書の核心的概念である「当事者批評」は，当事者が文学や芸術，娯楽作品を批評することで，自身の体験世界を表現する営みとして位置づけられている。

本書は三部構成から成る。第Ⅰ部「当事者批評の来し方・行く末」では，著者の代表的論考三編が収録されている。「当事者批評の背景——病者の光学とケアの倫理」では，ニーチェの「病者の光学」という視点を通して，定型発達の視座では見えない世界を当事者の眼差しから描き出す。「当事者批評の現状報告——総合型，個人研究型，対話型」では，当事者批評の多様な形式と，「当事者創作」や「当事者哲学」への展開が示される。「脳の多様性を映し出す自己世界——改めてなぜ『みんな水の中』なのか」では，DSM-5-TRを参照しつつ，自身の当事者性を精神医学的に読み解いている。

第Ⅱ部「当事者として対話に臨む」では，石原真衣（自伝的民族誌研究者），斎藤真理子（翻訳者），高野秀行（作家），頭木弘樹（文学紹介者），柴崎友香（小説家），松本俊彦（精神科医）ら，多様な立場の論者との対談が展開される。それぞれの相手に向けた共感的な応答が，著者自身の内的風景をも照らし出しており，対話そのものが当事者批評の実践として機能している。

第三部「自閉スペクトラム症者としてハイデガー、カントを読む」では、哲学者ハイデガーとカントを題材に、当事者の視座からの独自の哲学的読解が試みられている。ハイデガーの「存在」「気分」「他者」「時間」などの思索にASD的思考との共通点を見出し、強い「こだわり」や過集中、他者との距離感、死生観などを通じて当事者の共鳴を描く。一方、晩年のナチズム傾倒という「極端さ」や「誤謬」からは、自戒の契機を引き出す姿勢も見られる。カントについても、哲学の徹底性や時間への厳密さ、独身主義的生活などにASD特性との親和性を見出す。特に「非社会的社交性」という人間存在の二面性や、カント自身のASD特性がありながら社交好きで受身型のスキルによりその点を可能としていたという考察は、今日のASDのカモフラージュ（擬態）概念を先取りする洞察として示唆的である。

全体として、著者はDSM的な診断概念を超え、芸術家や思想家に内在する多様な「発達特性」を描き出すことで、「発達障害」概念の再構築、再定義を試みているように見える。日本語表現に不自由な臨床家の一人として、著者の文体と構想には強い刺激と魅惑、そして嗜癖性を覚える。今後も横道氏の「当事者批評」の歩みを注視していきたい。
